

芸術(音楽Ⅱ)「高校生にとって自分の音楽史を語る・奏でることの意味とは何か」

提案者 居城勝彦

助言講師 中地雅之

1. 本校からの提案

新学習指導要領では、高等学校芸術科において芸術への永続的な愛着心を育むことが掲げられている。これは現行の指導要領でも芸術科各科目の根底にある重要な目標である。この“芸術”という言葉をも“音楽”に置き直したとき、目の前にいる生徒たちに必要なことは何だろうか。本活動の発想の原点はそこにある。彼らにとって週1回の音楽の時間は、存分に表現活動に浸れるリフレッシュの時間である。短期的な連続性は意識しているが、生涯にわたるといった長期的な視点での連続性を意識することはないだろう。そこで、あえて「自分の音楽史を振り返る」という課題を設定し、今に立ち止まってこれまでを俯瞰し、今後の展望を持つという学習活動を設定した。この活動における3つの学びの様相については、以下のように考える。

・深い学び

自分が音や音楽と出会った場面を思い返す。自分はなぜその音楽にひかれたのか、楽曲の構成要素なのか、音楽に付随する体験なのか、音楽の持つ文化的・歴史的背景なのか。自分の言葉で語ることや再び演奏することを通して、音楽の記憶と現在の思考を再整理し、新たな意味付けをすることが可能となるだろう。

・対話的な学び

同じ時代を生きてきたもの同士が自分の音楽史を語り合う。そこに対話が生まれ、そして同じ音楽や楽曲に対する思いに重なる部分と異なる部分があることに気づくだろう。音楽への愛着の持ち方の相違を認め合うことを通して、音楽に対する多様な価値観が養われる場面となるだろう。

・主体的な学び

自分の音楽史を作成する過程を通して自分にとっての音楽の意味や価値を自覚していく。それを仲間と共有し語り、奏でるなかで音楽の心地よさや負の感情も自覚していくだろう。そして、これからの人生において自分が音楽とどのように関わっていくのかを考えていく。学校音楽教育の重要な一側面である、音楽を介して人とつながることに対して自分なりの考えを持って取り組めるようになることが期待される。

本校の生徒にとっては、ともに生活する仲間と音楽活動をする時間が保障されている最後の1年間である。このような環境は多くの生徒にとって人生最後かもしれない。今していること、これまでしてきたことの意味や価値を再認識し、これからの人生で音楽とどう関わるのかを考え表現する活動は、教師が生徒にとって未知の音楽文化と出会わせることと同じくらいの意味を持つ、思考を伴う表現活動になりうると考えている。

2. 協議会における議論

協議会には、小学校教員・中等教育学校教員・大学教員・学校図書館司書・大学院生・教科書編集者が参加していた。授業者自評、質疑応答、4～5人でのグループ協議、シェアリング、助言講師からのコメント、という流れで協議会を進めた。グループ協議では、実践者・研究者・院生といった異なる立場からの意見交流が活発に行われ、授業者と助言講師も各グループを巡回し、協議に参加した。協議会での話題は、以下の通りである。

「高校生にとって自分の音楽史を語る・奏でる意味」

音楽にどんな意味があるのか、自分にとって音楽にはどういう価値があるのかについて、各自が内省的にとらえ直す活動には、音楽と自分との関わりを見つめ直すために効果的な活動であった。経験として積み重ねてきた音楽を、ワークシートを用いて言語化・視覚化することによって、生徒たちは自分の変化に気づいているだろう。また、各自が音楽史としてまとめた音楽経験を共有することも、自分の変化に気づく機会となっていた。

生徒の発言にもあった「音楽を振り返ることは人生を振り返ることである」を多くの生徒が実感できた授業であった。また、本時でとり上げた4曲をさらに深めたいという思いや、前時に挙げられた他の曲を聴いてみたいという学習感想からは、

中学校時代の合唱曲を再び歌って懐かしむということだけではない、より主体的に表現や鑑賞の活動に取り組もうとする生徒の動機付けにもなっている。

「学校図書館との連携」

音楽科の学習で学校外の演奏家をアウトリーチとして活用する実践は一般的になっているが、学校内のリソースを音楽室にアウトリーチするという活動にはさまざまな可能性があるだろう。本実践では、授業者が活動の目的や展開計画を司書としっかりと打ち合わせしていることが大事なポイントである。

協議の中では、図書室で生徒が演奏したい曲を選び、それに関する本を司書が紹介してコンサートを開くという中等教育学校での実践も報告された。本来、音を出すことが憚られる図書室という空間で音楽を奏でることは抵抗があるかもしれない。しかし、そこにこそ感性と知性との新たなつながりを見いだせる活動の可能性があると示している実践であろう。

「ブックトークの活用」

「ブックトーク」自体に馴染みのない参会者も多かったので、司書が授業で生徒に対しておこなったブックトークの一部を再現してもらった。今回は「私にとっての出会い」をテーマにしている。このテーマ設定を授業者と司書が相談し、目的や展開計画を共有していることが、生徒にとって表現活動中心の音楽の授業と関連があることを意識させる上で重要である。また、選書のポイントとして、音楽に関する話題の本や小説は、直接的な結びつきが強くなるために選んでいない。そのことによって、生徒が音楽と自分との出会いを意識して音楽史を作成したことがうかがえる。

「音楽科における言語活動」

多くの場合、教材として取り上げた鑑賞曲に対する批評文を書く活動が設定される。その際、生徒ひとり一人の文章力や音楽を愛好する程度が影響することが懸念される。しかし、本実践では自分の経験をもとに語る（記述する）、演奏する、曲に込めた思いを語り合う・聴き合う、それらをもとに自分の音楽経験やその時の思いを振り返るという一連の流れの中で言語活動が取り入れられるので、生徒にとっては取り組みやすいだろう。

3. 課題

助言講師から、ドイツ語圏での音楽科の学習領域構成について話があった。日本と同じような、表現（歌唱・器楽）、創作、鑑賞のほか、省察（レフレクション）という音楽について考える活動領域があることが紹介された。今回の実践は、この領域に相当する活動であり、とかく感性という側面から語られることの多い芸術科の学習活動において、考える時間を設定することは重要であるという指摘があった。

授業者としては、学校音楽教育の出口である高等学校芸術科音楽で取り組むこの活動が、生徒にとって生涯教育としての音楽の入り口につながる活動であってほしいという意図で設定している。その面からも、本活動が生徒ひとり一人にとって自分と音楽との関わりについて省察する取り組みとなったととらえている。

また、ブックトークを活動の展開の中に取り入れたことは、生徒が生活する社会と音楽をつなげる意味で大変効果的であった。明治以降の日本の音楽教育はいわゆる“社会にないもの”を教えてきたと歴史的な観点からとらえられる。本実践の取り組みは、社会に存在する音楽と学校音楽教育で扱う音楽を重ね合わせ、そのつながりを生徒に自らの経験を通して意識させようとしたものである。

“楽しいだけでは、音楽は破壊される”という言葉もあるように、楽しさを伴った音楽経験が学びとして位置づくためには、従来の学習活動とは異なる視点で単元開発をすることが必要である。生徒が音楽を通してどのように社会とつながることができるのか、それを発達段階や他教科での学習との整合性を図りながら考えていくことが、今後の課題である。